

はじめての 商品先物取引



商品先物取引は少額の資金でその何十倍以上もの金額の取引を行うものです。
相場の変動により、短期間で大きな利益を得る可能性もありますが、
反対に投下資金以上の損失を生じることもあります。

CONTENTS

■商品先物取引って、なに？	2~3
■商品先物取引は「証拠金取引」	4~5
■商品先物取引のリスク	6~7
■リスクを踏まえて取引	8~9
■商品先物取引の注文は	
商品先物取引業者に委託	10~11
■自己責任に基づいた取引	12~13
■さあ、取引をはじめよう	14~15

JCFIA

JAPAN COMMODITY FUTURES
INDUSTRY ASSOCIATION

日本商品先物振興協会

〒103-0016 東京都中央区日本橋小網町9-4
TEL: 03-3664-5731 FAX: 03-3664-5733 <http://www.jcfia.gr.jp/>

2013.03

JCFIA

JAPAN COMMODITY FUTURES
INDUSTRY ASSOCIATION

日本商品先物振興協会

商品先物取引って、なに？

いつもより早起きした週末、新聞を読んでいたはじめさん(👤)は、「商品先物取引」という言葉が目につくことに気づきました。そこで、ご近所の物知りのまさるさん(👤)に商品先物取引のしくみや実際の取引のしかたを聞いてみることにしました。



金の先物価格

限月	始値	高値	安値	終値
2限月	4940	4951	4851	4876
4限月	4946	4953	4856	4879
6限月	4945	4954	4854	4878
8限月	4948	4960	4859	4882
10限月	4950	4964	4862	4886
12限月	4956	4969	4867	4890

それに、取引に決済期限があるのさ
決済に「期限」？

差金決済

「買った時」または「売った時」の先物価格 → 現在の先物価格

差額の精算のみ

商品の現物の受渡しをしないで差金決済ができるんだ!
「差金決済」？

商品先物取引のここがポイント!

将来の価格を今、決める商品先物取引

生鮮食品の卸売市場では、その日の食品の価格を決めています。また株式市場でも、その日の株価を決めています。一方、農産物や工業資源などの商品の先物取引を行っている商品先物市場では、最長で1年先の将来の商品の価格を、需要や供給の見通しなどを織り込んで、現時点で決めています。

取引に決済期限がある

商品先物取引は将来の決められた期日に商品の受渡しを約束する取引ですから、取引には期限があります。この期限の月を「限月」その限月の最終取引日を「納会日」といいますが、限月や納会日は商品によって異なります。納会日を迎えるとその限月の取引は終了となりますが、代わって新しい限月の取引が始まります。この取引の始まりから納会日までの期間は最長で1年です。

「差金決済」ができるということは…

商品先物取引では、必ずしも商品の受渡しを行う必要はありません。それは、納会の前であれば「買い」の取引は「売る(転売)」ことにより、「売り」の取引は「買う(買戻し)」ことにより、買った時または売った時の価格と現在の価格との差額を精算して取引を終了できるからです。これを「差金決済(さきんけっさい)」といいます。差金決済は商品先物取引の最大の特徴です。

もっと詳しく知りたい人は…

商品先物取引で「リスクヘッジ」

商品の価格は、需給の状況や経済動向などで変動しますので、生産者やメーカー、加工業者、卸売業者、ユーザーなどは、商品価格の変動による経営上のリスクに常にさらされます。しかし、商品先物市場を利用して、現時点で将来の売買価格を確定させることにより、価格変動による経営のリスクを回避することができます。これを「リスクヘッジ」といい、企業の経営の安定に役立っています。

「限月(げんげつ)」ごとに取引

各商品は「限月(げんげつ)」と呼ばれる取引期限ごとに売買が行われ、価格が決められます。商品には、

- 毎月受渡しを行うもの
- 偶数月ごとに受渡しを行うもの
- 奇数月ごとに受渡しを行うもの
- 便宜上、限月はあるが受渡しはできないものがあります。

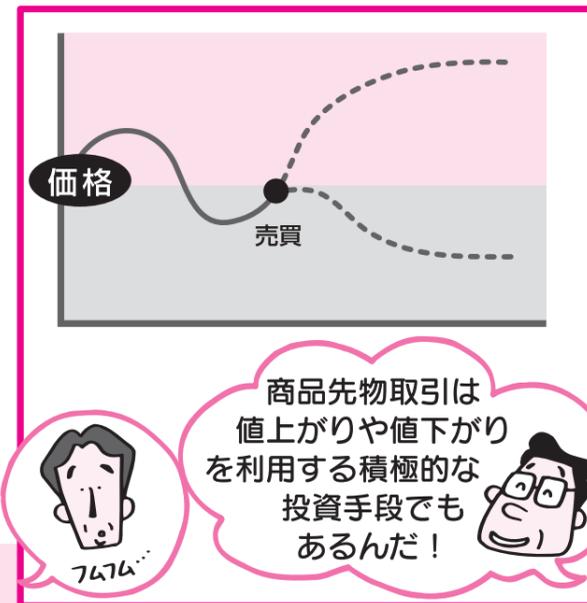
例えば、「6月限(がつぎり)を買う」とか、「9月限を売る」というようにして取引が行われます。

差金決済ができるということは…

差金決済で取引を終えることを前提とすれば、引き取る意思のない商品を「買う」約束をすることも、持っていない商品を「売る」約束をすることもできるはずですが、実際、商品先物取引では、将来、商品の価格が上昇すると思えば「買い」から、逆に、将来、価格が下落すると思えば「売り」から取引を始めて収益の獲得を目指します。もちろん納会日を待って、商品先物市場を通じて商品を引き取ることも、商品を渡して現金を受け取ることもできます。

商品先物取引は「証拠金取引」

商品先物取引は、「将来の価格を、今、決める取引」で、取引に決済期限があり、また、差金決済ができる取引であると聞いて興味が出てきたはじめさん。そして、商品先物取引には、もう一つ、大きな特徴があります。それは、「証拠金」というものを預けて行う取引であるということです。



商品先物取引のここがポイント!

「証拠金」を預託して取引

株取引では売買代金の全額を受払いますが、商品先物取引では総額の3~8%程度の「取引証拠金」を取引の担保として預託し売買を始めます。この投資資金効率の良さは商品先物取引のメリットですが、証拠金の額に比べて十数倍~三十数倍の取引をするため、大きな利益を期待できる反面、それと同等の損失を被る可能性も否定できません。

*取引証拠金の額は商品先物取引業者によって異なる場合があります。

取引銘柄（上場商品）は身近なモノばかり

商品先物取引は、商品先物取引法に基づき農林水産大臣または経済産業大臣の許可を受けた商品取引所が開設する商品先物市場で行われています。日本には現在2つの商品取引所があり、貴金属、農産物、石油製品など生活に密着した多様な商品や商品指数が上場されています。

積極的な投資手段

商品先物取引は、「先物価格」の値上がりや値下がりを利用して「安い時に買い契約をして、高い時に転売して差金決済する」、あるいは「高い時に売り契約をして、安い時に買い戻して差金決済する」ことで利益を得ようとする積極的な投資手段でもあります。

もっと詳しく知りたい人は...

取引に必要な証拠金について

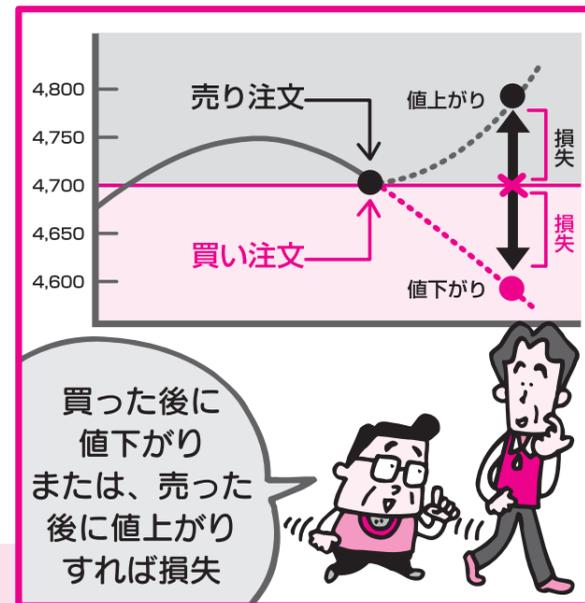
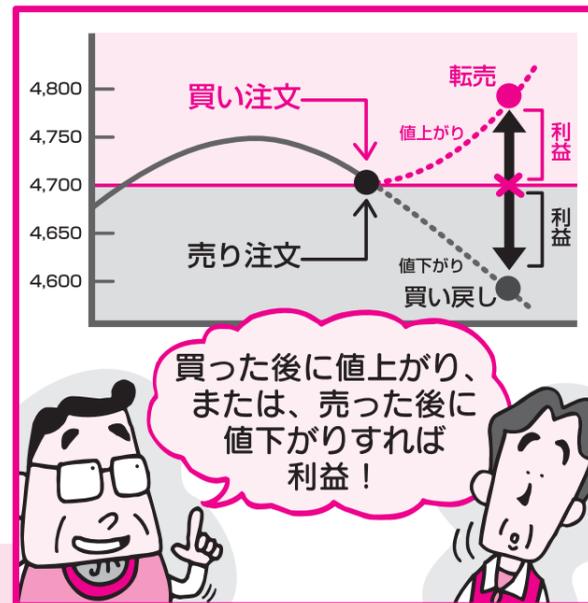
商品先物取引業者は日本商品清算機構（JCCH）が発表する“スパン・パラメータ”に基づいて“取引証拠金”の額を決定します。“スパン”は価格変動リスクに応じて必要な証拠金の額を計算するシステムです。過去の値動きを参考にして、価格変動リスクが高まっている場合には証拠金を多めに預ることで、委託者を価格変動のリスクから保護する役割を果たします。

商品取引所と主な上場商品

東京商品取引所	金（標準・ミニ）、白金（標準・ミニ）、銀、パラジウム、ガソリン、灯油、原油、中京石油（ガソリン・灯油）、ゴム、とうもろこし、大豆、小豆、粗糖など
大阪堂島商品取引所	コメ（東京・大阪）、とうもろこし、大豆、小豆、冷凍エビ、粗糖、コーン75指数など

商品先物取引のリスク

商品先物取引には、預貯金や株式取引などとは大きなちがいがあることがわかったはじめさん。それでは次に、取引による利益や損失の計算のしかたを教えてくださいながら、取引にはリスクもともなうことをしっかり理解していきましょう。



商品先物取引のここがポイント!

利益となる場合の計算例

金先物価格は1gあたりで表示されますが、「金（標準）取引」は1kg単位の取引ですので、1g4,700円の時に買い、その後100円値上がりした4,800円の時に反対売買（転売）すれば100円の1千倍、10万円の売買差益が得られます。また4,700円の時に売り、100円値下がりした4,600円の時に反対売買（買い戻し）した場合にも、やはり10万円の売買差益が得られます。

損失となる場合の計算例

金（標準）取引を1g4,700円の時に買い、その後100円値下がりした4,600円の時に反対売買（転売）して決済したとします。その場合、前頁の例とは反対に10万円の売買差損が生じます。また4,700円の時に売り、その後100円値上がりした4,800円の時に反対売買（買い戻し）して決済した場合にも、やはり10万円の売買差損となります。

リスクコントロールはしっかりと

商品先物取引では取引に伴うリスクをうまくコントロールすることが大切です。そのためには取引開始前に1取引あたりの損失の限度額を決めておくことをお勧めします。取引を始めたら、その限度額内で取引を決済するための売買注文（ストップ注文）を出しておきましょう。リスクをコントロールする方法はこれだけではありません。リスクとうまくつき合えば、大きな損を回避することも可能です。

もっと詳しく知りたい人は…

取引単位と「総取引金額」

商品先物取引では取引する単位を「枚」と呼びます。また、商品市場での価格（約定値段）は「呼び値」という単位で表示されます。例えば、「金標準取引」1枚は1kg、呼び値は1gですから、実際の「総取引金額」は、金標準取引1枚で約定値段の1千倍になります。この倍率は商品によって異なります。

*金先物取引には標準取引のほかに取引単位が100gの「金（ミニ）取引」があります。

$$\text{表示価格} \times \text{倍率} \times \text{枚数} = \text{総取引金額}$$

損益計算のしかたと追加の資金預託

売買が成立した時の値段を「約定値段(やくじょうねだん)」といいます。先物価格は常に変動するので、取引期間中はそれに伴い損益も常に変動します。

- 「買い」から始めた場合の損益
(現在の先物価格 - 買った時の約定値段) × 倍率
- 「売り」から始めた場合の損益
(売った時の約定値段 - 現在の先物価格) × 倍率

取引中の計算上の損益を「値洗益(ねあらいえき)」または「値洗損(ねあらいそん)」といいます。損益は取引を決済した時に確定します(実際の取引では、別途、商品先物取引業者への委託手数料や、手数料にかかる消費税が必要となります)。「値洗損」が拡大し、計算上の預り証拠金額が委託者証拠金の額を下回った場合、取引を決済せずに続けるには、委託者証拠金を上回るまで追加の資金預託が必要となります。